

東西交通史上より見たるパルミユラ

小玉新次郎

パルミユラでは、西紀一世紀頃建立の墳墓から種々の漢代絹布⁽¹⁾や、また印度風デザインの見られる織物⁽²⁾が發掘されたが、それらはベグラム發見の漢代漆器⁽³⁾や、西域、インド及びインドシナで出土したローマ貨幣その他の西方系遺物⁽⁴⁾と共に、漢・ローマ時代における東西交易の事實を有力に物語るものである。

古來、東西の交易ルートには、これを大別して陸路と海路の二つがあつた。陸路は長安を發ち、敦煌を経て西し、天山南路の大沙漠を北道或いは南道に依つて横切り、パミール高原に達する。パミールを越えてオクサス河下流域を過ぎると、安息の東界メルフ（アンテイオケイア）に來るが、こゝは南へ折れてインドへ行くか、そのまゝ西に向つて安息、シリアに到る分岐點である。西に向えば、ヘカトンピュロス、カスピア關門、エクバタナを通つてバルティアの心臟部ベビュロニアのセレウケイアに至る。そこから一つは、アシユル、ハトラ、ニシピスよりゼウグマに出、他の一つはセレウケイアよりネアポリス附近でユーフラテス河を涉り、西岸を走つて、ドゥウラ・ユーロポス、ニケポリオムを経てゼウグマに達する。又ドゥウラ・ユーロポスから西して沙漠地帯を過ぎ、パルミユラを経てシリア海岸へ出る近道もあつたことは後に述べる。ゼウグマもしくはシリア海岸からは小アジア或いは地中海を経てローマに

向うことは言を俟たない。この陸路は即ち、以前から東西を結ぶ大幹線であつたと思われ、永くキャラバンによつて利用された、いわゆるシルクルートである。

海路は中國南方からインドシナ、マライ半島南端、マラッカ海峽を経て、印度洋、紅海を通り地中海に向うか、印度洋からペルシア灣頭に至り、ユーフラテス河を溯つて、バビュロンより前述の陸路に合する。尙この外、中國から西藏、ガンジス河邊を経てインド南部の諸港に達する路があり、又インドと西方とを結んで、インド中央部からカーブル、バクトラの奥地を通るか、或いはインダス下流域から海岸づたいに西方に向う陸路と、インドよりペルシア灣ユーフラテス河或いは紅海を経て西に通じる海路とがあつた。但し以上は東西を結ぶ言わば基本的な交易路で、實際は同じ方向へ行くにも幾つかの路があり、又利用された路が時代によつて異つてゐる。

パルミユラがローマとインド乃至中國との交易路上の都市として利用されたことは同地の發掘品等によつて明白であるが、その交易路上の仲繼驛として史上に登場し來る時期については判然としない。たゞ出土した漢代絹布やイアムブリコスの碑文等から判斷すれば、西紀前一〇〇年頃、中國と結ぶキャラバンがドゥウラ・ユーロポス―パルミユラ―シリヤ海岸のルートを近道として用い始めたらしいのである。しかし、この頃から漸次用いられたとしても、パルミユラが眞にキャラバン都市としての活況を呈したのは西紀二世紀より三世紀に至る間である。

二

一體、中國と中央アジアとの政治的交渉は前漢武帝(西紀前一四〇―八七年)の時代に始まる。武帝は匈奴討滅のため兩度にわたつて張騫を西域に遣わし、太初四年(西紀前一〇二年)親らも大宛に遠征した結果、漢の武威は遙か西トルキスタンに及び、西方との交易も安全となり、漢より絹布、鐵器、漆器の類を多く輸出するようになった。即ちキャラ

ラバンがバルミユラを通り始めた時期である。

更に宣帝の神爵二年（西紀前六〇年）鄭吉が西域都護の官に任ぜられて烏壘城に駐まり、西域三十六國を督察するに至つて一層の促進を見たが、王莽立つて以來、中國と西方との交渉は一時途絶えている。後漢明帝（西紀五七―七五年）の時、再び匈奴を討伐して西域經略を始め、班超は貴霜朝の軍を撃つて和帝の永和三年（西紀九一年）にほゞ目的を達し、龜茲に鎮して西域都護となり、漢威をパミールの東西に輝かせた。この頃部將甘英が大秦國（ローマ）に使せんとして地中海に臨んだわけである。しかし後漢の西域經營は方針が一定せず、その後、桓帝の元嘉二年（西紀一五二年）頃からは漢威は全く西方に及ばず、班超父子の時代、即ち一世紀後半から二世紀前半の頃が漢とバルティア、貴霜、インド等との交通最も頻繁であつた。

海上交通において、中國と東南アジア及びインド諸國との交易が盛んになつたのも、前漢武帝の南方經略後のことであるが、陸路と異り、匈奴等の障礙がなかつたことも原因して、時代を経ると共に進展し、桓帝の延熹九年（西紀一六六年）には大秦王安敦（アントニヌス）の使者と稱するものが海路、洛陽に到着していることで明らか如く、西方ローマ方面と直接交通が行われている。たゞ何れにせよ、陸路、海路を通じて、中國商人の交易範圍が自國周邊を遠く離れることは殆んどなかつた。⁽⁶⁾

バルティアでは西紀前九二年、ミトゥリグテス二世が、ポントス王國の擴張に備え、西方ローマ帝國に使節を派して軍事同盟を結び、ユーフラテス河を以て兩國の國境としてから、ローマ・バルティア兩者の關係は暫時友好的であつたが、同二世の晩年には國內亂れ、プフラテス三世（西紀前七〇―五七年）の登極後は、アルメニアの歸屬或いはメソポタミアの爭奪をめぐるつて、二百七十年以上の長きにわたり、兩國の間に抗争と平和の時代が繰返される。バルティアは東方へはインド、中國に連り、西は小アジア、シリア、地中海岸への交通路を扼し、更に南アラビアを距ててエジプトへの通路の關門をなしており、主な東西交易路の中、カスピ海岸から黒海に出る最北路、及び印度から紅海を

通つて地中海に至る最南路を除いて、他は悉くその支配下を通過していたのである。従つて同國の主なる財源は、これら領内の東西交易路を通る物資に重税を課して輸出入の統制をなし、その中間搾取による利潤を以て充てていた。ローマとの紛争の原因となつたアルメニアや、メソポタミアの問題も、所詮はかゝる意味において、同國存立の生命線を確保せんとしたに外ならなかつた。しかし、北方匈奴、サカ族の侵入、國內諸侯の反亂、王室内の葛藤が絶える時のなかつたパルティアの對外政策は、全般的にみて消極的にならざるを得なかつた。

一方、ローマの對パルティア策は、パルティア王國の攻略、即ちアレクサンドロス帝國の奪回という方針に一貫していたが、クラススの安息大遠征、カイサルのパルティア遠征計畫、アントニウスのパルティア討伐は何れも失敗に終り、皇帝アウグストゥスが、ひたすら安息との和睦に努力した結果、西紀前二〇年、兩者間の平和が始めて結ばれた。⁽²⁾ Pax Romana のおかげで交易ルートは安全となり、ローマ人の間には東洋の奢侈品に對する要求が増し、東西交易はこゝに非常な活氣を帯びて來た。パルミュラでは既にバアル神殿が建立され、西紀前九年には東西隊商路上、ローマとパルティアの中間に位する最も重要な貿易センターなつたのである。

西紀一世紀に入れば、ネロ皇帝(五四—六八年)に至るまで、ローマとパルティアとの間にアルメニア問題を中心に再び衝突があり、パルミュラを通る交易路も一時的に淋れた。これは恰も後漢と西域との交渉が途絶えた時期である。一世紀後半にはローマとパルティアとの間に平和状態が回復し、後漢も前述の如くその最盛期を迎えて西域方面に最も力を注いでおり、當時のパルミュラの隆盛は墳墓や發掘絹布に窺われる。⁽³⁾

三

シルクロードが途絶えることはなかつたが、それでも拘らず西紀一世紀におけるインドと西方との交易は陸路より

も海路（紅海を廻る）の方が盛んであつた。シリアの混亂、パルティアの興起、スキタイ族の侵寇、途中の土人の妨害等は、只さえ長くて危険な陸路を一層困難にし、加うるに東地中海におけるアレクサンドリアの隆盛、季節風の發見が海上交易を促進したのである。⁽¹⁰⁾そしてエジプト・インド間の往復は、季節風を利用して毎年定期的に船によつて行われた。普通、アフリカ東岸のベレニケーもしくはミュオス・ホルモスを真夏に出航し、三十日にしてアラビア南岸のオケエリスかカネーに至り、そこから季節風に乗つて大洋を横斷し、四十日の後、インド西南岸のムージリスに到着する。インドより西方に向う場合は同じく季節風を利用するため、冬一月に出航した。⁽¹¹⁾かくてインドから紅海を通つて送られてきた物資の大部分はアフリカ東岸の前記二港からコプトスを経てナイル河を下り、アレクサンドリアに運ばれたのであるが、その一部はアラビヤ西岸のレウケー・コーメーで陸上げしてペトラへ向つたことをストラポーンが述べている。⁽¹²⁾又「エリヌトウラー海案内記」には、「ベルニケー（ベレニケー）の左手に當つて、ミュオス・ホルモスから二・三日の航程だけ東に向ひ、傍の灣を横斷するとレウケー・コーメーと呼ばれる別の碇泊地と要塞とがあり、こゝからペトウラ（ペトラ）なるナビタイオイの王マリカスの許へ（道が通じている）。この地も亦アラビアから来るさして大きくない船にとつて一寸取引地のようになつてゐる……⁽¹³⁾と云ひ、ペトラはインド貿易だけでなく、アラビアとの交易においてもかなりの役割を演じていたことが分る。ペトラからは西のかたギヤザ、地中海へ進む道と、北方ダマスクスに向う道とに分れ、ダマスクスは隊商路によつてパルミユラに通ずる門戸をなしていた。⁽¹⁴⁾ペトラの繁榮は又ユーフラテス河口から直結するキャラバンに負う所大であつたが、更に東方と陸路が通じるユーフラテス中流域からパルミユラを経てペトラに至る道を開こうとした。⁽¹⁵⁾パルミユラがキャラバン都市として成長するには、かゝる位置を占めたペトラの企圖に基く點があつたと思われる。そして、ナビタイ國の都として又隊商路の集中點として榮えたペトラが、ローマの仇敵パルティアを援助したため、之を貴めたローマ皇帝トラヤヌスによつて一〇五年征服されて以來、パルミユラが東西交易の大集散地として之に代ることとなつた。⁽¹⁶⁾

かくしてパルミユラ人はナバタイ人の掌握していた紅海岸一帯の通商の大部分を承け繼いだのみならず、更に足を伸ばしてエジプトのコプトスに進出し、ギルドをつくつて商館を建てることをローマから認められて⁽¹⁷⁾いる。又パルミユラ人は東方に向つても手を擴げた。ペトラよりも北方にあつた地の利により、従來メソポタミアに留まつていた東方からの輸入物資をも吸收することができたのである。パルミユラで發見された銘辭は、パルティア領諸都市にパルミユラ人の商業セトルメント *Fondouq* のあつたことを教えている。⁽¹⁸⁾

四

ペトラをローマの屬州としたトラヤヌス帝(九八—一〇七年)の積極的な東方政策は、アウグストゥスやテイベリウスにみられた政治的意圖よりも、ペルシア灣、インドへのルート⁽¹⁹⁾の完全な支配とメソポタミアを通る商品に對する重税の取得という經濟上の目的を持ち、それは當時活潑となつていた海上交易と平行して陸上の交易をも支配せんとするものであつた。

トラヤヌスを繼いだハドリアヌス帝(一一七—一三八年)は、先帝の政策と異つて守備に重點を置き、アルメニアを表面上ローマの從屬國とするに止め、アウグストゥスの策を復活してユーフラテス河を以てパルティアとの境界とした。そして續くアントニヌス・ピウス帝(一三八—一六一年)時代と共に約半世紀間、兩國の關係は再び平和状態に戻る。パルミユラはこの頃からローマに併合され、著しくヘレナイズされたが、又大いに自立性を保つところあり、交易は自己の手中に握つて、その繁榮の絶頂期に入つたのである。例えばパルミユラの莊大な遺蹟が當時の商人の富裕ぶりを示している外、ハドリアヌス帝は、⁽²⁰⁾一三九年パルミユラを *Hadriana Palmyra* 或いは *Hadrianopolis* と呼び、パルミユラ人も亦「ハドリアヌスのパルミユラ人」との名を取つて歡喜と謝意を表わし、多くの市民はローマ市

民権を採り、従來のセム系の名にローマの家族名を加えるものが現われた。⁽²²⁾ 又一五〇年頃、ユーフラテス河畔のパルティア都市、ヴォロゲシアスにおいてさえ、一パルミユラ商人が、アウグステイ「ローマの神々なる皇帝」に神殿を奉獻したことが記録されている。⁽²³⁾ しかし一三七年制定のパルミユラの關稅法はローマの影響を受けつゝも亦強く獨立した性格を示し、パルミユラの特徴を遺憾なく發揮している。⁽²⁴⁾

元來、パルミユラ人は沙漠の真中に根據を有つてキャラバンに従事していたが、遠隔の地に及ぶ商業遠征に慣れた彼等は、かゝる發展の氣運に乗じて、海を越えての交易にも、さして困難を感じず、アウレリウス帝（一六一—一八〇年）時代に、パルミユラ商人はローマ、パルティアとの交易に留まらず、東はバビュロン、ヴォロゲシア、フォラト、カラフ、西はダマスカス、ペトラ、エジプトからダキア（ルーマニア）、ガリア、ヒスパニア、ブリタニアにも達したのである。⁽²⁵⁾ 當時のローマ・パルティア關係を顧ると、アントニヌス帝の晩年にアルメニア、シリアに侵入して來たパルティア軍を、次のアウレリウス帝時代に斥けた結果、西紀一六六年、アルメニアのローマ歸屬を認め、ユーフラテス河以東にローマ領上部メソポタミアを承認して兩者の間に再々度の平和條約が締結されている。一六六年は、先述した所謂大秦王安敦の使者と稱する者が海路中國に來た年次である。

西紀一九七年、ローマ帝國の内訌に乗じて、パルティア王ウオロゲセス四世（一九〇—二〇九年）がアルメニアとメソポタミアの奪回を企てたが、セプティミウス・セウエルス帝（一九三—二一一年）は、反撃してセレウケイア、クテシポーンを占領、一九九年北部メソポタミアをローマ屬州として引上げた。セウエルスの子カラカラも即位すると、アレクサンドロス帝國の樹立を夢想して二一五年東征の旅に出發、バビュロニアからメディアに攻め入つたが、二一七年暗殺者の手に仆れた。パルティアのアルタバノス五世（二一五—二二四年）はこの機を逃さず、軍を進めてニシビスにローマ軍を大敗せしめて和を結んだが、戰勝つたパルティアも二二四年に内部崩壊し、西アジアは新興ササン朝ペルシアの制覇に委ねられ、パルティア・ローマ兩國の間に交された、アルメニア・メソポタミアに關する抗爭の歴

史はササン朝がイスラーム帝國によつて滅ぼされる(六四一年)まで尙約四世紀間にわたつて繼承される。ササン朝のシャプール一世(二四二—二七二年)はシリアに攻め入つて、一度は敗れた(二四三年)が、後にアルメニアを従え、アンティオケイアを占領し、二六〇年には、皇帝ヴァレリアヌスを、當時キリスト教會の西アジアでの中心地たるエデッサの一戦において捕虜とし、西アジアではササン朝の覇業の前に、ローマの威信は全く地に墮ちていたのである。

五

パルミユラのオデナトゥス *Odaenathus* はこのシャプール一世をユーフラテス河畔に追いつめて勝利を博してからは、自らパルシア王の稱號たる「王の王」*Baŕkēur Baŕkēur—Šar Šarriani* を以て任じ、ローマ元老院からもアウグストゥス *Augustus*、イムペラートル *Imperator* の稱號を贈られ、シリアから小アジアにわたる地域を併せ統治することになつた。オデナトゥスとローマ皇帝ガリエヌスとの合名の下に貨幣が発行されたのはこの時である。しかし二六六／七年、彼は甥のマコニウス *Maconius* に弑され、その後、息子のヴァーバラトゥス *Vaballathus* が即位したが幼年のため、オデナトゥスの后で「アラビアのクレオパトラ」と呼ばれたゼノビア *Zenobia* の手に實權が移つた。

やがてゼノビアは商路の通過する凡ての國々、又隊商貿易に従事する凡ゆる人々を合せ、パルミユラを首都とする單一獨立國家の建設を圖つたが、それはまたオデナトゥス以來の夢を實現せんとしたのであつた。彼女は女王となつて、パルミユラに豪華な宮殿を造營し、パルミユラ人—特に弓騎兵—のみならず、近邊の兵を集めて七萬人に及ぶ軍隊を組織し、當時ローマが東方の備えに手薄であつたのに乘じて、二七〇年にはシリア、アラビア、エジプト、小

アジアにまたがる廣範な地域をその傘下に收めていた。アンティオケイアとアレクサンドリアにおいて鑄造された貨幣の中に、一面にローマ皇帝アウレリアヌスの肖像と稱號を、他面にはヴァーブラトゥスの肖像と稱號（國王並びにイムペラートル）を刻んだものが見られるのは、當時、新興バルミユラがローマ東邊に伸ばした權勢を示すものである。更にゼノビアがアウグスタ、ヴァーブラトゥスがアウグストゥスの號を稱するに及んで、バルミユラは自らローマに對して獨立と平等とを宣するに至り、貨幣面からもローマ皇帝の像は消え、ゼノビアの肖像だけを刻んだものが現われている。

アウレリアヌス帝はこの新興勢力の増大を抑え、かつは東方諸州の離脱を防ぐため、積極的手段を講ずる必要に迫られていた。折しも北方ゲルマン民族の侵入を食止めた帝は、二七一年東征の軍を興し、翌年シリアにおける兩度の會戦に勝つて、ゼノビアとその殘存部隊をバルミユラ後退せしめた。形勢不利となつたゼノビアはササン朝の援助を求めんとしたが、ユーフラテス河畔で、追跡し來つたローマ騎兵の一隊に捕えられた。アウレリアヌス帝はバルミユラに駐屯軍を留めたのみで引揚げたが、歸途、ローマ軍に對するバルミユラ人の反亂の報に接するや、直ちに軍を返えして討滅に向い、こゝにバルミユラはローマ軍によつて徹底的な掠奪破壊を蒙つたのである（二七三年）。ゼノビアは二七四年、アウレリアヌスの凱旋式典に捕虜として行進の列に加えられた後、獄中に自ら食を絶つて死んだと云ふ。

さて三世紀に入つてからは、上述の如きバルミユラの榮華に反し、従前好みを通じていた貴霜、ローマは何れも衰退を見せ、皇帝カラカラ（二一一—二七年）の政策はアレクサンドリアを中心とするローマ・インド間の海上交易をも殆んど停滞せしめた。⁽²⁷⁾しかしローマ人はハドリアヌスの頃、即ちバルミユラがその絶頂期に入つた頃から、コーカサス、黒海、カスピ海を通る東西交通の最北路の利用を考えはじめた。⁽²⁸⁾これには當時カドフィセス二世、カニシカ王の下、大月氏の統一が與つて力あつたと思われる。しかし、この事はバルミユラにとつては死活に係る問題であ

つた。そしてゼノビア等がローマと戦つて大國家建設を夢見た陰には、脅威に晒された同地通過の東西交易路とその交易にもとずく富とを飽くまでも己が掌中に確保せんとする焦心があつたと考えられる。

六

パルミユラは西紀前一世紀頃から東西交易に當るキャラバンによつて、中國、インド―安息と地中海―ローマとを結ぶ捷徑上の驛として利用されはじめた。西紀前一世紀末よりアウグストゥス、續くテイベリウスがこの地方を政治的に經略し、一つの安定政權下におかれ、ローマ人の東洋産物就中絹に對する需要も増し、後漢亦西域經營に力を入れてシルクルートは活況を呈し、南海貿易の進展と相俟つて、パルミユラは東西交易の仲繼地として一層の殷賑ぶりを見せた。

更にハドリアヌス帝が經濟上の意圖を以て東方政策をとり、一三〇年親しくこの地を訪れ、一三七年新しい關稅法を定めてから二七三年までパルミユラの繁榮はその絶頂期に入り、ゼノビア時代に至つて、短期間とは云え、ユーフラテス河よりナイル河までの廣範な地域を版圖としたのである。

パルミユラを挟んで、片やローマ帝國は終始アレクサンドロス帝國の奪回を企て、他方パルティア、ササン朝ペルシアはインド・ギリシアの文化を攝取しつつもイラン勢力の代表として、メソポタミア、イラン高原を舞臺に統一を圖り、兩者の間には抗争と平和の時代が繰返された。パルミユラが交易上活況を呈したのは、いうまでもなく平和時においてであるが、抗争時にも、その政治的地位を強化している。それは交易路確保のため、この地を自己の配下に置こうとする兩國の間に立つて、パルミユラが言わばキャスティング・ヴォート⁽²⁾を握つたことに起因している。モムゼンも「ローマとパルティア間の凡ゆる軌轢において、問題はパルミユラ人がどういふ態度をとるかに在つた」と

述べている。

ローマは文化の低い地方には土着の國王を立て、保護國とし、文化水準の高まるのをまつて屬州に編入するのが常であり、西アジアにおいては、オリエント文化よりも、當時既かなり擴つていたギリシア文化を利用した。パルミユラもローマの東方政策の影響をうけてヘレナイズされたが、それにも拘らず、キャラバン都市としてのパルミユラは、パルティア王國、ササン朝パルシアのみならず、ローマ帝國に對しても能く獨立と自由とを保ち得たのである。

しかし、パルミユラは正しく東西を結ぶキャラバン交易によつてのみ榮えた都市であつた。三世紀末、中國との交通進まず、ローマ帝國も東方との貿易に當り、戰亂や重税の負擔を伴うパルティア、ササン朝、更に新興パルミユラを通ることの不利を悟つて最北路の利用を考えると同時に、パルミユラの破局は始まつていた。それはササン朝と續くイスラーム帝國とによる陸海交通の齟齬の前に再び興ることのなかつたその後のパルミユラを合せ考えるならば盡し當然のことである。

註

- (一) 拙稿「パルミユラ發掘の漢文編布について」(本誌三號所載、一九五五年)
- (二) Serig, H., *Ornamenta Palmyrena Antiquiora. Syria*, XXI, Paris, 1940.
- (三) Hackin, J., *Recherches archéologiques à Begram.* (Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, IX, 1939).
- (四) Warrington, E. H., *The Commerce between the Roman Empire and India.* Cambridge, 1928, 272ff.
Wheeler, R. E. M., *Articamedu: an Indo-Roman Trading Station on the East Coast of India.* New Delhi, 1946.
——— *Rome Beyond the Imperial Frontiers.* London, 1954.
- (五) 竹島淳夫「歐洲古代學界の展覧」⑤(古代學三卷三號、一九五四年)
Tarn, W. W., *Parthia. C. A. H. IX*, p. 599.

- (6) 史記大宛傳、漢書西域傳、魏略西域傳、羽田亨「西域文化史」(昭和二十三年)、『Teggart, F. J., Rome and China. California, 1939. 等参照。』
- (7) パルティアとローマとの交渉については、栗野教授「安息王アルタタンノ三世王令のギリシア碑文について」(『出土史料によるギリシア史の研究』一六十一—二六頁、一九五〇年)、『Rostovtzeff, M., Social & Economic History of the Roman Empire. Oxford, 1926. 参照。』
- (8) (9) 前掲拙稿。』
- (10) Rawlinson, H. G., Intercourse between India and the Western World. Cambridge, 1926, pp. 88-89. 季節風の發見年代に關しては、村川堅太郎「ローマ『帝政期』初期に於ける南海貿易の進展」(『エリトリア海峽内記』昭和二十三年、一九一—二〇頁)参照。』
- (11) Plin., N. H., VI, xxiii, 104, 106; *Peripl. M. Eryth.*, XXXIX, XLIX, LVI.
- (12) Strab., XVI, iv 24.
- (13) *Peripl. M. Eryth.*, XIX.
- (14) マヤステスを北上してオロントス河畔アンライオケイアに至れば、また東方パルミョラ、ドーブラタス河、シヤトロムク、向うほか、四方で道が通じつた (Charlesworth, M. P., Trades-Routes and Commerce of the Roman Empire. Cambridge, 1926, p. 39).
- (15) Rostovtzeff, M., Caravan Cities. Oxford, 1932, p. 29.
- (16) パルミョラは、ローマとインド又ローマとパルティア間の最短交易路上にあり、而もキヤラバンが相當に保護を受けることができたので、商人は、こぞして之を利用し、シエラとヘトラを結ぶ如き道は廢れた。(Warrington, op. cit., pp. 100-101)
- (17) L'année épigraphique. 1912, no. 171.
- エジプトにおける交易上、コプトスの占めた地位が如何に大きかつたかは、ストラボンも、「コプトスとヘルネーケーとの間は地峽をなし、パルティアオス二世ピラザルプホス(西紀前二八五—二四六年)が最初にこの道路を築いたと云われ、經驗がその有用性を立證し、今日ではインド、アラビアからの凡ゆる物資、又紅海を通じて来る凡ゆるエチオピア貨物はコプトスにもたらされる。…又その沿道には水槽が設けられている…。」と述ぶ(Strab., XVII, i, 45)、『アサズヌスターニスと紅海岸の前記兩港とコプトスとを通ずる商路の水槽を修理して東方貿易者の便を圖つてゐることを理解できる。』

(18) fondouq は租界の如き、外國における獨立した政治組織體。そこではパルミラ商人とギリシア商人との間に、はじきりした一線が畫かれた。パルミラ人は自らをギリシア世界に屬するものとせき、パルミラ人たることを誇りとしたらしい (Rostovtzeff, op. cit., pp. 143-144)。パルミラのキヤラハン都市とこの構造・性格とについては別の機會で論ぶ。

(19) Cumont, F., *The Frontier Provinces of the East*. C. A. H. XI, p. 632.
一〇六六年以後はシリヤ地方のヘレニキスは容易に擴がり土語の餘蘊は消え、キヤミツ語が畫かれた (Warrington, op. cit., p. 92)。

(20) パルミラがローマに併合された年代は明らかでない。一世紀のプリニウスはパルミラをローマとパルタイアの間の單獨國家とし (N. H. V. 88)、二世紀のマツビオヌスはローマに臣屬する國の中に數えてゐる (Prooem. 2)。少くともルキウス・ウァルヌスのパルタイア戦以來、そして恐らくパルタイアヌス時代以來、パルミラはローマ軍が駐屯したことを示す出土した銘辭は古體ラテン語 (Seyrig, H., *Syria*, XIV, 1933, 152ff.)。

ヘレニキス帝時代は交易範圍をめぐり又輸送物資をめぐり古代經濟生活上の最盛時に當る (Toutain, J., *Economic Life of the Ancient World*. London, 1930, p. 320)。

(21) パルタイアヌス帝の施策の詳細は判明しないが、とにかく平和政策をとり、特にアルメニア北方地帯、パルミラ、パトラに留意した。その理由としてウォーミンントンは次の三つを擧げる。

(a) カラフ、ゾオロゲシマヌヤホロヌスからパルミラ、パトラへ運する(アラビヤ)ルートを確認せよれば、メソポタミア保持を必要とした。

(b) 黒海、カスビ海地方を保有すればアルメニアを屬州とする要はない。

(c) 陸路の利益を得るにはパルタイアの平和が最上の保證である。(Warrington, op. cit., pp. 98-99)。

(22) Rostovtzeff, *Caravan Cities*, p. 108.

(23) *Supplementum Epigraphicum Graecum* VII. Leiden, 1934, 135.

(24) 羅密オジウシツヤ、ウマイヤ Rostovtzeff, op. cit.; Robinson, D., *Baalbec Palmyra*. New York, 1946, pp. 65-66; Starcky, J., *Palmyra*. Paris, 1952, 88ff.

(25) Robinson, op. cit., p. 67.

(26) Robinson, op. cit.; Rostovtzeff, op. cit.; Magie, D., *Roman Rule in Asia Minor*. Princeton, 1950, 716ff. 參照。

- (27) アウレリウス帝以來、インド發見のローマ貨幣は極めて少量になるが、印度北部に例外が見られ、これはパルミユラの活況を反映したものと考えられる (Warmington, *op. cit.*, p. 136)。
- (28) Charlesworth, *op. cit.*, p. 110; Warmington, *op. cit.*, pp. 95, 291.
- (29) Mommsen, *Th.*, *The Provinces of the Roman Empire*. Vol. II. New York, 1887, p. 93.

——關西學院大學文學部助手——